



義賊ロビンが反乱したのは、領主の汚いやり方への反発であった。

ロビンの父親パンドルフ・ロビンソンも義賊であった。パンドルフは、人望・財力・兵力などの力があり、パドマリア一番の名士であった。

ある時、パドマリア領主・岩永平斗（いわながへいと）は財力のあるパンドルフに相談を持ちかけた。

平斗

「食料株が下がっており、これ以上下がるとパドマリアへの食料供給が滞り、危険な状態になる。どうか、貴殿の財力で買い支えて欲しい。もちろん、こちらも同時に全力で買い支える」

パンドルフ

「すぐには金は動かさない。少し考えさせてくれ」

そう言って、その日の話は終わった。

皆のためと思い、パンドルフはすぐに資金を集め、現物で食料株の買い入れをした。すると、株価は少し持ち直した。その後も領主から何度も買い入れの話が来たため、パンドルフはパドマリアのためと思って食料株を買い入れた。すると、徐々に現物取引以上の取引、つまり信用取引となって行った。パンドルフも株価は上がって行っているし、パドマリアのためになっていると思ったので、強気に買い入れを続けた。しかし、ある日株価は大暴落した。追証（おいしょう）が発生したが、支払いが不可能な金額となってしまったため、パンドルフは破産し、領地の殆どを失ってしまった。

パンドルフ

「先祖伝来の土地を我が代でなくしてしまっ、ご先祖様に申し訳がない・・・」

来る日も来る日もそう呟き、そのショックでパンドルフは病死した。

この大暴落にはパドマリア領主・平斗とファンズが結託して、パンドルフが信用取引を行った直後に全ての持ち株を全力売りし、大儲けしたという噂があった。その噂を耳にした息子のロビンはファンズと領主に強い恨みを持った。その時に彼らへの復讐を誓い、それを実行に移したのである。それと同時に、大人の世界は汚いという認識を持つようになり、先祖から有しているシャーウッドの森を永遠の理想郷「エターナルランド」にしようという夢を持った。

森の殆どが没収されたが、辛うじて先祖伝来の小さな家と庭の一部だけは残った。

パンドルフ

「ピーター、我が家には先祖からの言い伝えがある。もし、困ったら「永遠の箱」を開けよ、と」

そう言い残してパンドルフは死んで行った。

その永遠の箱は、単なる古びた箱であった。ロビンはショックで数日間、何もしたくなかったが、その父の話が気になり、その永遠の箱を開けることとした。

ロビン



「中には魔法の力が入っていて、開けると煙が出て来て、オイラはおじいちゃんになってしまうのではないだろうか？」

「それならそれで、早く死ねていいや」

「とりあえず、開けてみよう」

そんなことを思いながら、箱を開けると、そこには一枚の地図があり、自分の領地にある先祖の銅像に何かの印があった。そこをロビンは一人で来る日も来る日も掘ると、扉が出て来て地下室が発見された。そこには、多くの金銀財宝があり、これによってロビンは投資を行い、傾きかけた家を立て直し、先祖からの領地も徐々に取り戻して行った。そこへ、例のファンドの株価釣り上げからの空売り事件が起こったのである。ロビンは空売りに対抗して買い入れを市民と共に行うことで、空売りファンドを潰した。そして、領主も兵を向けて来たので、返り討ちにしてクーデターを成功させたのであった。

モロー

「・・・と言うわけなのです」

「私が調べたのは以上です」

蓮也

「なるほど、ロビンが反乱したのは、そうした経緯があるのか。岩永家は当家とは親戚関係だが、その平斗はろくでもない輩であるな」

既に蓮也軍はパドマリア城に入城し、その王の間にて、諜報官キュリアス・モローが調査した報告を聞いていた。

ゼイソン

「どうなさいますよう」

蓮也

「ロビンには、旧領であった土地を全て与える、としておけ」

ゼイソン

「ははっ、かしこまりました」

蓮也はロビンの旧領を復帰させ、その土地の保有を正式に認めた。しかし、それでも多感な時期についてロビンの傷は癒えることはなかった。

蓮也

「それと、ロビンを我が軍に加えたい。本国が外交を怠っている故、今後はパドマリアを守るための人財が多く必要になってくると思われる」

ゼイソン

「確かに、あの者やその配下は優秀です。しかし、まだ少年ですし、今の話を聞くと、こちらの配下になるかどうかはわかりませぬ」

蓮也

「とりあえず、手紙は私直々に書く。モローよ、すぐにロビンに届けてくれ」

モロー

「ははっ！」

蓮也

「それと、モローは今まで私が個人的に雇って来たが、これからは正式に雇用する。今回は正式な使者として行ってもらう」



モロー

「かしこまりました！」

ここでモローは正式にロータジア国に所属し、パドマリア領主・蓮也の与力となった。ここに蓮也軍の遊撃部隊を率いる神速將軍キュリアス・モローが誕生したのであった。

モローは直ぐに使者としてロビンの住むシャーウッドの森へ行き、直接、ロビンと面会した。ロビンはその手紙を読み、蓮也直筆の書状であることを確認した。ロビンの返答は、保留する、とのことであった。

モローの帰り際、ロビンが尋ねる。

ロビン

「モローさんは、なんであの王子様に仕えているいるんだい？」

モロー

「あのお方は、私の最初の友だからです」

ロビン

「友お？」

ロビンはモローの意外な返答に少し怪訝な顔をしたが、このモローの「友」という言葉になぜかロビンは惹かれた。また、蓮也が先祖伝来の「清廉の弓」を引けたことを思い出していた。そして、先祖が蓮也を清廉の士であることを認めているのではないか、と思った。そうしたことが合わさって、ロビンの心に小さな光を灯した。

ロビン

「・・・オイラ、一人っ子でさ、兄貴が欲しいんだ」

「蓮也さんはオイラの兄貴になってくれるかな・・・？」

モロー

「きっと、なってくれますよ」

モローは軽く微笑んでそう言った。

蓮也

「モローよ、私の配下にならぬか？」

モロー

「俺は誰にもつかえねーよ」

蓮也

「ならば、私の友にならぬか」

過去の蓮也の言葉をモローは思い出していた。

ロビンはモローに返事の手紙を渡し、その日の面会は終わった。

蓮也

「貴殿に我が兄者となって頂くことを所望す、か」

「おい、モロー、一体お前はロビンとどんな交渉をしてきたのだ？」



モロー

「いえ、まあ、その、特に交渉ではないのですが・・・」

蓮也

「まあ、いい。私も優秀な弟であれば歓迎だ」

シャーウッドの森にて蓮也は主だった配下を連れてロビンと面会をした。

穏やかな日差しで、空気は心地よく澄み渡っていた。森の大きなテーブルで会食することとなった。

ロビン

「じゃ、今日から蓮也さんはオイラの兄貴だ！」

蓮也

「ああ、義兄弟と言うことだ」

ロビン

「それとモローさんも兄貴になってくれ w」

モロー

「俺もですかい？ w」

蓮也

「おい、モロー、なってやれ」

ロビン

「よし、決まりだ！モローの兄貴、よろしくな！」

「そして、蓮也の兄貴も！」

アルベルト

「おい、蓮也様に馴れ馴れしいぞ！義兄弟はいいが、しっかりと臣下の礼は取れ」

「それとモロー殿はお前よりも年上だ、ちゃんと敬語を使え！」

ロビン

「ったく～、わかったよお」

蓮也

「まあ、今日はめでたい義兄弟の宴だ。アルベルトよ、そのくらいにしておけ」

アルベルト

「ははっ」

「それにしても、蓮也様の弟君となってしまっちは、もうお前をゲンコツで頭を殴れなくなったな w」

ロビン

「ついでにアルベルトのおっさんも俺の兄貴にしてやってもいいぞ w」

アルベルト

「おっさんとは何事だ w」

ロビン

「いて！また頭を小突きやがった！ w」

ゼイソン

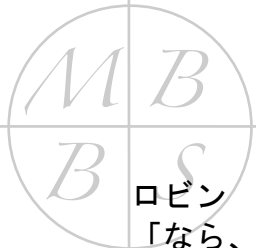
「ほっほっほ w 我が軍も賑やかになったのう w」

ロビン

「このじっちゃんは？」

アルベルト

「このお方は軍師のゼイソン様だ」



ロビン

「なら、オイラのじっちゃんにしてやるよ w」

アルベルト

「いい加減、口の利き方を弁えろ w」

ロビン

「いてえ！また小突きやがった！」

ゼイソン

「ほっほっほ w」

ロビン

「オイラの配下は全員、オイラの兄弟みたいなもんだ。だから蓮也の兄貴たちとオイラたちはみんな兄弟だ w」

その席に同席しているウェンディ、ブランド、スカーレット、リチャードなどがいた。皆、グラスを片手にしている。

ロビン

「それでは、我ら皆、兄弟ってことで」

「乾杯！」

シャーウッドの森に乾杯の音が響きわたった。

【解説】

ロビンの父の死は、ロビンに心的外傷を与えた。それを癒したのがモローの「友」というキーワードである。これは心のグルーミングであり、グルーミングを行うとオキシトシンなどの神経伝達物質が分泌されることで癒しが起こる（忘却させる働きがある。つまり、癒しとは忘却であると言える）。そうした意味では、蓮也もモローも孤独に生きて来た経緯があり、彼らが育てて来た「友」という概念が、ロビンの心を開かせたのであろう。